

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★

## ハンテッド (THE HUNTED)

配給/日本ヘラルド映画

2003 (平成15) 年5月25日鑑賞

Data

監督: ウィリアム・フリードキン  
出演: トミー・リー・ジョーンズ/  
ベニチオ・デル・トロ/コ  
ー・ニールセン

### 👁️👁️ みどころ

この映画は『トラッカー』という原作に基づいたもの。トラッキングとは「動物や人の足跡を追って、自然や環境を観察すること」であり、この技術によって原作者のトムは多くの遭難者の保護に成功した。かつて師弟であった特殊任務につく2人の男が、追う側と追われる側に分かれ、「カリ」と呼ばれる実戦型格闘技でサバイバルゲームを展開する。ハラハラドキドキの本格的追跡ドラマは十分楽しめる。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <ホンモノの追跡ドラマ>

ハンテッド (HUNTED) とは、直訳すれば「ハントされた (つかまってしまった)」だが、まさに映画は迫真の追跡ドラマ。それも、かつての師弟が追う側と追われる側に分かれての追跡だ。

追う側は、今は野生動物保護官として働く初老の男L. T. (トミー・リー・ジョーンズ)。L. T. のモデルとなったのは後述のトム・ブラウン・ジュニアの原作『トラッカー』(追跡者)だ。

他方、追われる側となった、かつてのL. T. の弟子のアーロン・ハラム (ベニチオ・デル・トロ) は、1999年のコソボ紛争で、大量殺戮。「セルビア人指揮官を暗殺せよ」との指令を実行し、「銀星賞」を受けたナイフ殺人のプロ。しかし、コソボで目のあたりにした大量虐殺などの無残な体験はアーロンの神経に異常をもたらしていた。ボスニアやコソボ紛争での悲惨な体験は、多くの兵士たちに「バルカン症候群」と呼ばれる「戦争後遺症」をもたらしているそのことだ。

## <オレゴン州での連続殺人事件>

オレゴン州の深い森の中で、高性能ライフルを持った2人のハンターがナイフで襲われ、四肢を切りとられた悲惨な死体となって発見された。これを捜査するFBIの女性捜査官アビー・ダレル（コニー・ニールセン）らは、犯人を特殊なプロと断定し、L. T. にその追跡を依頼した。ここに、師弟の追跡劇が始まったのだ。

## <原作はトム・ブラウン・ジュニアの『トラッカー』>

この映画の原作となったトム・ブラウン・ジュニア原作の『トラッカー』は1978年に出版された。トムは実在の人物で、7歳のときにアパッチ族の先住民と出会い、原野の中で生きる道を彼らから学んだ。そして人工的な道具を一切持たず、ナイフさえ持たずに原野で生きる智恵や技を磨いたトムは、行方不明者の捜索を依頼された際、トラッキングの技術を使って遭難者を保護することに成功した。それ以来、トムは多くの行方不明となったハンターやハイカー、誘拐された子供などを捜し出し、「トラッカー」としての評判が広がったうえ、警察やFBIの指導も行ってきたということだ。

そして、1978年にトムの経緯をつづった『トラッカー』が出版された後は、トラッカー・スクールが設立され、トムは世界中から集まる人々に、サバイバルやトラッキングの技術を教えているとのこと。

トラッキングとは、簡単に言えば、「動物や人の足跡を追って、自然や環境を観察すること」であり、要するに、「足跡や気配、心理状況などを読み取って、目的地へ無事に到着する技術」のことだ。

## <格闘技はフィリピンの「カリ」>

軍事大国アメリカは、ボスニアやコソボの紛争でも、「世界の憲兵」としての役割を果たしてきた。例えば、映画『ブラックホーク・ダウン』（2003年）では、内戦が続くソマリアの首都にアメリカ軍の特殊部隊が空挺降下し、奮闘する姿を描く。他方、特殊部隊も必要だ。例えば、映画『ラスト・キャッスル（THE LAST CASTLE）』（2002年）や『ボーンアイデンティティー』（2003年）などで描かれたFBIのスパイは特殊訓練を受けたプロ中のプロだ。

この映画でL. T. やアーロンが使う実戦型格闘技は「カリ」。これは、フィリピンで使われていた格闘スタイルを基本としたもので、『ボーンアイデンティティー』（2003年）ではマット・デイモンも使っていたケンカ殺法。そして、特殊訓練を受けた彼らは、拳銃を使わずナイフのみで闘う。しかも、そのナイフも、山の中で自ら石や鉄を探して、これを加工してつくり出すという原始的なものだ。クライマックスでの師弟2人による、手作りの武器と「カリ」による死闘は大いに迫力がある。

### <すごい追跡劇・・・>

L. T. がトラッキングの技術を使って、アーロンを追いつめていく、オレゴン州の深い森の中でのシーンは確かに迫力があり、また説得力もある。

森の中で足跡を捜し、その足跡が何を物語るのかを感じ、読み取りながら、犯人の隠れ家までたどりつくのだ。このように、風を感じ、気配を感じ、犯人の心理を読みとっていく追跡者をトミー・リー・ジョーンズが見事に演じている。

そして、これを伏線とした上で、今度は本格的な市街地を含めた、アーロンの逃走そしてその追跡劇だ。いったん逮捕されたアーロンは護送車から逃げ出した。その逃走劇は大都会の中だから、当然車が使われ、地下鉄が使われる。そしてその追跡の過程では、一般市民やFBI捜査官の犠牲も出た。

しかし、L. T. はこれを執拗に追っていく。追っ手に取り囲まれ、鉄塔の頂上から川の中へ身を投じたアーロンは、川を下り、山の中へ逃げ込んだ。アーロンはそこに潜んで武器をつくり、ワナを仕掛けてL. T. が追跡してくるのを待ち受けたのだ。そして、遂にL. T. はこれを発見。2人の対決というクライマックス場面を迎えることになる。FBI捜査官らはいわば、刺身のツマとして出ているだけ。あくまで2人の追跡劇がメインだ。

### <しかしよく考えてみると・・・？>

この大都会の中から激流までに至る追跡劇は確かに迫力があり、多くのシーンでプロ中のプロとしての技を見せてくれる。しかし、ちょっと冷静に考えてみると、いくらプロでも大都会の中で、車や地下鉄に乗って行ってしまった人間を、どうやって追跡できるの・・・？とってしまうが・・・。

もっとも、そう冷静に考えていたのでは、この映画は台無し。あくまでプロの追跡劇として楽しまなければ・・・。

2003（平成15）年5月26日記